



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第5主日B年(2021年2月7日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：ヨブ記 7章1-4、6-7節

第二朗読：使徒パウロのコリントの教会への手紙1 9章16-19、22-23節

福音朗読：マルコによる福音 1章29-39節

## 今日のテーマ：人々の哀しみとイエスさまの使命

三つの朗読から

第一朗読に「<sup>ろうく</sup>「<sup>よよ</sup>「<sup>さだ</sup>「<sup>ほうしゅう</sup>「<sup>ほうしゅう</sup>」(3節)とあります。ヘブライ語で「アーマール」だそうですが、多くの場合、仕事のもつ暗くつらい側面が強調されるときに使われるのだそうです。働きや仕事、<sup>ろうどう</sup>「<sup>くる</sup>「<sup>わざわ</sup>「<sup>みいだ</sup>「<sup>よろこ</sup>「<sup>か</sup>「<sup>はたら</sup>「<sup>はたら</sup>」と見なすのか、喜びと見なすのかで人生は変わってくるでしょう。喜びとなるためには何か特別な意味を見出さなければならないのです。

第二朗読の冒頭「わたしは不幸なのです」(16節)は印象的です。パウロにとって、福音を告げ知らせるのは喜びでした。もちろん、<sup>こんなん</sup>「<sup>ともな</sup>「<sup>せんきょう</sup>「<sup>せんきょう</sup>」のために彼はあらゆる困難を背負い込みます。なぜなら、キリストの愛から誰も彼を引き離すことはできないからです(ロマ8章31-39)。むしろ、告げ知らせる使命が果たせないとき、不幸であると感じています。

福音朗読の中にある小さなことば「<sup>いちどう</sup>「<sup>いっしょ</sup>「<sup>いっしょ</sup>」(31節)に注目しましょう。ペトロの<sup>しゅうとめ</sup>「<sup>しゅうとめ</sup>」は、喜んでイエスをもてなします。それは救われた者がイエスさまに対する最大の<sup>たいおう</sup>「<sup>たいおう</sup>」です。イエスさまに<sup>つか</sup>「<sup>つか</sup>」に仕えるとは、神に仕えることに他なりません。

ところで、福音の最後のところでイエスさまはよく祈った後に、「ほかの町へ」(38節)行きます。イエスさまを<sup>さが</sup>「<sup>さが</sup>」す人々、イエスさまを待ちわびている人々がカファルナウムにはたくさんいたでしょう。「みんなが捜しています」(37節)はそのことを<sup>おし</sup>「<sup>おし</sup>」てくれます。しかし、イエスさまは<sup>しゅうつぱつ</sup>「<sup>しゅうつぱつ</sup>」し発します。売名行為や金集めに興味があれば、カファルナウムに残って次々に奇跡をおこなったはずですが。しかし、イエスさまは出かけていくのです。それは、父なる神との<sup>まじ</sup>「<sup>まじ</sup>」の交わりの祈りの中で自分の使命に

気がついたからです。イエスさまの使命は「宣教」でした。宣べ伝えることでした。奇跡はそのための手段にすぎません。

## 説教

第一朗読の『ヨブ記』は哀しむ人間の心情吐露です。「労苦の夜」(3節)とは、生きる意味を失った人間にとっては、働くことは苦しみでしかなくなることを示唆することばです。そして、「わたしの命は風にすぎない」(7節)というつぶやきは、いのちが移ろいゆくもので、人生はむなししいという体験から生じることばです。

第二朗読でのパウロは、こんな人生の哀しさ、むなしさを知っていたのでしょう。しかし、復活したイエスさまと出会った彼は、人生の新しい意味を見出します。「そうせずにはいられない」(16節)は福音宣教の使命に気づいたパウロの気持ちを伝えてくれることばです。使命はその人の内側から湧き上がってくるものです。そのためなら、多少の苦しみも厭わないというのが彼の偽らざる心情でしょう。その使命に基づく人生の在り方を示したのが「すべての人に対してすべてのものになりました」(22節)です。人は自分に与えられた使命を生きる際に、自分勝手に、自分の想いだけで生きるものではありません。いつも相手の側に立つようになるのです。

福音朗読は、場面を想像してみましょう。「会堂」で悪霊に憑かれた男から悪霊を追い出したイエスさまは、ペトロの「家」に入り、しゅうとめの熱病を癒します。それから、夕方、日の沈む頃(32節)、「戸口」に集まってきた病気や悪霊に取り憑かれた人々を、「戸口」で癒します。「会堂」というイスラエルの人々にとっての宗教生活の場、「家」という人にとっての日常生活の場、そして「戸口」というパブリックな生活の場。カファルナウムでの最初の一日で、イエスさまは人間のありとあらゆる生活の場面で、人間を苦しめる悪の力を駆逐していったのです。まさにすべての人々にイエスさまは関わるのです。イエスさまの公生活を凝縮し、暗示する一日です。

「夕方になって日が沈むと」(32節)は、確かに情景を描写することばですが、それ以上の何かをわたしたちに与えてくれるようです。薄暮の中、人々は病人や悪霊に取り憑かれた者をイエスのもとに連れてきます。町の多くの人々の目を避けて。あるいは、連れてきた人々も、彼らの存在を避けていたのでしょうか。人の目につかないところに置いていったのかもしれませんが。「せめて、イエスに会わせたい」という連れてきた人々の想いと、「わたしの命は風にすぎない」(第一朗読)と人生をあきらめかけている者たちとの想いが交差します。イエスさまは、そんな哀しみにある人々と共にあるのです。